

# ロボットと美術

機械 × 身体 の ビジュアルイメージ

今日の日本では、産業や医療の現場から、漫画・アニメ等のフィクションに至るまで、社会のあらゆる場面でロボットが重要な役割を演じています。中でも人の形をした「ヒューマノイド」は、美術をはじめとする諸芸術において身体表現と結びつき、独自の展開をとげてきました。本展は、ロボットと美術とのかかわりの歴史を紹介しながら、芸術と科学技術、エンターテインメント、そして私たちの身体観の結びつきを明らかにしようとする試みです。

>>> 展覧会特設サイト >>> <http://robot-art.jp/>

## みどころ

- 【1】美術からプラモデル、アニメ、そして最新ロボティクスまで、様々なロボットが一堂に!
- 【2】ロボットを文化史、美術史的にあつかう初めての展覧会
- 【3】本展のために制作したオリジナルアニメーションを上映!



オリジナルアニメーション制作スタッフ  
 企画・原案 トリメガ (川西由里、工藤健志、村上敬)  
 監督 ロマのフ比嘉  
 脚本 湯浅弘章  
 キャラクター原案 D.K. / キャラクターデザイン 田中誠輝  
 メカニカルデザイン 寺岡賢司  
 音楽 プロデュース = 神前暁、作曲 = MONACA

## セクション1：戦前—ロボットの誕生と同時代文化

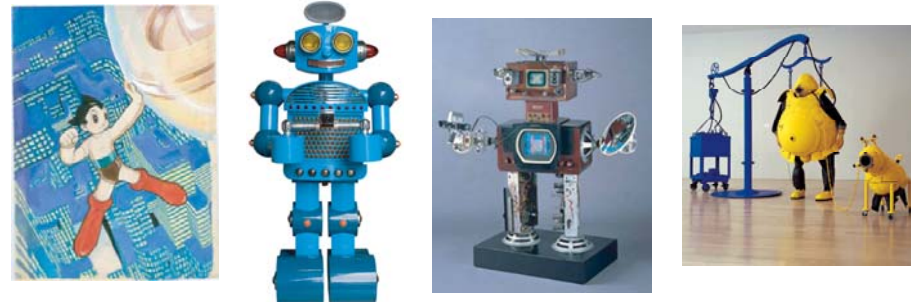
「ロボット」という言葉は1920年、チェコの文学者カレル・チャペックの戯曲『R.U.R.』において、初めて登場しました。「ロボット」の概念はすぐに日本にも移入され、科学、文学、演劇、美術といったあらゆるジャンルに登場しました。博覧会などのイベントや映画・演劇において人々がロボットを目にしはじめた頃、美術の世界では、幾何学的造形による人体表現や、機械と人体を組み合わせた作品など、ロボットを生んだ時代を象徴する、あるいは先取りするような作品が制作されました。



(左から)  
 河辺昌久《メカニズム》(板橋区立美術館)  
 矢部友衛《裸婦》(早稲田大学會津八一記念博物館)  
 古賀春江《現実線を切る主智的表情》(西日本新聞社)  
 映画「メトロポリス」パンフレット (個人蔵)

## セクション2：戦後I—大衆文化の興隆と戦後アートへの動向

戦後日本のロボットは大衆文化の中で発展したといっても過言ではないでしょう。《鉄腕アトム》、《鉄人28号》から《機動戦士ガンダム》に至るロボットコンテンツは多くの支持を集め、現在では日本独自の文化として海外でも高く評価されています。また、博覧会で活躍したロボットたちの存在も忘れることはできません。一方、戦後美術においてロボットは人間の負の側面を象徴するものとして描かれがちでした。しかし20世紀末には、人間のパートナーとしてのロボット像を模索する現代美術作家やデザイナーが登場し、21世紀における新しいロボットのイメージを提示しています。



(左から)  
 手塚治虫『鉄腕アトム』第2巻表紙原画(手塚プロダクション) / 相澤次郎《カメラマンロボット》(財)日本児童文化研究所 / ナム・ジュン・バイク《冥王星人》(福岡市美術館) / ヤノベケンジ《イエロースーツ》(高橋コレクション)

## セクション3：戦後II—ロボットイメージの現在 ロボティクスからアートまで

20世紀末には、大衆文化としてのロボットが大きく展開するとともに、現実の二足歩行ロボットの技術も長足の進歩を遂げました。これらの成果を踏まえ、ロボットと通じて人間を理解しようとする研究が登場したり、社会におけるロボットのなるものあり方を考える現代美術作家やデザイナーが登場しました。

このコーナーでは、ロボティクス(ロボット学)として進歩を続けるロボット研究の成果を資料等で紹介するとともに、ロボット文化の多様な発達を反映した美術作品を展示し、現代日本の文化にロボットがどのように息づいているかを検証します。



(左から)  
 KYOSHO、ロボ・ガレージ《MANOI PF1》  
 村田製作所《ムラタセイサク君》  
 浅井真紀  
 『初音ミク・アペンド(MIKU Append)』フィギュア

【主催】島根県立石見美術館ほか 【助成】(財)地域創造  
 【休館日】毎週火曜日(11月23日は開館)、11月24日、12月28～31日、1月1日  
 【開館時間】10:00～18:30(入館は18:00まで)  
 【観覧料】※( )内は、20名以上の団体料金  
 [企画展] 一般1,000(800)円、大学生600(450)円、小中高生300(250)円  
 [企画・コレクション展セット] 一般1,150(920)円、大学生700(530)円、小中高生300(250)円  
 【問合せ】〒698-0022 島根県益田市有明町5-15 島根県芸術文化センター「クラフト」内 島根県立石見美術館  
 担当: 志田尾(広報)、川西(学芸) TEL0856-31-1860/FAX0856-31-1884 <http://www.grandtoit.jp>